柿（日立図書）

ふるさと教本きくがわ

菊川市教育委員会

ふるさと教本きくがわ

菊川市教育委員会

菊川市教育委員会

ふるさと教本きくがわ

目 次

凡 例
第１章　菊川の歴史 …… 3
　コラム１　高天神城の攻防と菊川 …… 28
　コラム２　"今川さま"と櫻草用水 …… 29
　コラム３　菊川市自治体沿革史 …… 30
第２章　地区の特色 …… 31
　コラム４　菊川城館遺跡群 …… 44
　コラム５　小笠に残る焼き鹿「坊ノ谷土人形」 …… 46
第３章　菊川事典 …… 47
索 引
図版出典

凡 例

1　本書は、菊川市の主な歴史を紹介したものです。

2　本書では、文化財等の年代を以下のとおり地図に示しました。

古代 ●（旧石器～奈良・平安時代）
中世 ●（鎌倉・室町～戦国時代）
近世 ●（江戸時代）
近現代 ●（明治～昭和時代）

3　二次元コードが記載された文化財は、三次元データをお手持ちのスマートフォンやタブレット、パソコンなどでご覧いただけます。
　三次元データは、データ量が多いため通信環境や通信料にご注意ください。また、お使いの端末のバージョンによっては正しく表示されないことがあります。
　あらかじめご承知ください。

4　文化財等を見学する際は、土地所有者や周辺住民の迷惑にならないよう注意し、マナーの遵守をお願いします。

5　掲載された文化財等は、管理上の都合や所有者の意向などにより公開されていないものもありますが、お問い合わせは、菊川市教育委員会社会教育課文化振興係にお願いします。

6　本書の内容は、2024年3月現在のものです。

7　本書は、菊川市教育委員会社会教育課が編集・作成しました。

8　本書の制作にあたり、個人・各機関等から御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

（五十音順、敬称略）

［個　人］小泉　禄紀　佐藤　祐嗣　谷口　安倫
　　戸塚　和美　藤村　翔

［機　関］菊川市教育委員会　静岡県スポーツ・文化観光部文化振興文化財課　静岡県埋蔵文化財センター
　　東京国立博物館　富士市教育委員会
　　藤枝市スポーツ文化観光部文化財課

第１章
菊川の歴史

三角縁神獣鏡（上平川大塚古墳）
（複製品、原品：東京国立博物館 所蔵）

1 旧石器・縄文時代

自然の中で生きた石器時代人と菊川

人類の誕生は今から約 400 万年前と言われていますが、日本列島で生活が営まれるのは約 3.6 万年前の旧石器時代の終わり頃です。旧石器時代は、狩猟・漁労や植物性食物の採取をして生活する段階で、打製の石器が専ら用いられた旧石器時代と、弓矢と土器が使用されて以降の縄文時代に分けられます。

旧石器時代の遺跡は、市内には三沢西原遺跡があり、槍先にあたるナイフ形石器と木葉形尖頭器が発見されています。また、石焼料理の痕跡と考えられる礫を集めた状況も確認されるなど、獣を追い移動生活をする人々の、短期的な滞在地であったと考えられています。

縄文時代は、約 13,000 年前から 10,000 年間近く続きました。土器は、縄目の文様が多く施されるため縄文土器と呼ばれます。市内の三沢西原遺跡と石畑遺跡では竪穴建物跡が発見され、縄文土器の他に石鏃・石斧・石皿など多くの石器が出土しました。この２遺跡は、定住性の高い村であったと考えられます。

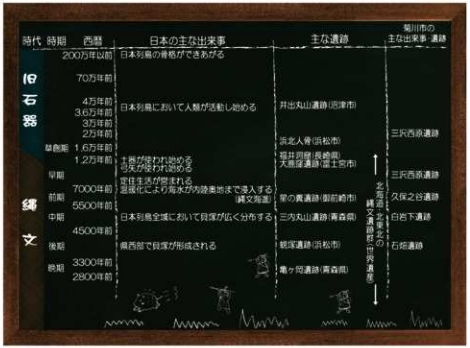


写真１　旧石器時代の槍先（三沢西原遺跡）【地図：P71】

写真２　縄文土器（左：白岩下遺跡【地図：P70】、右：富士市・浅間林遺跡）
約 12,000 年前に土器が作られるようになり、食べられるものが多くなりました。左がナイフ形石器、右が木葉形尖頭器です。縄文時代中期の土器は、豊かな装飾が施されます。ともに槍先として使用されました。

写真３　縄文時代の矢じり（久保之谷遺跡）【地図：P70】
弓矢は縄文時代から使用され、すばやい小型の動物や鳥を獲ることができました。黒曜石や貝殻で作られます。

写真４　縄文時代のムラ（浜松市・観塚遺跡）
定住がはじまり、大きなムラも営まれます。中央に広場をもち、周囲に住居や墓が作られます。環状集落と呼ばれ、貝塚を伴うムラもあります。

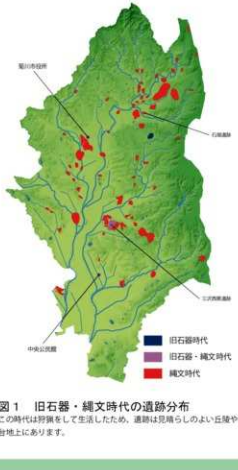


図１　旧石器・縄文時代の遺跡分布
この時代は狩猟をして生活したため、遺跡は見晴らしのよい丘陵や台地上にあります。

2 弥生時代

水田耕作を始めた菊川の人々

稲作は、縄文時代の終わり頃に朝鮮半島から北部九州に伝わり、関西地方では紀元前数百年頃には水田稲作が開始されました。弥生時代は、本格的な稲作の始まりと金属器の使用を特徴としますが、静岡県内での弥生時代の開始は、だいぶ遅れ紀元前２～１世紀頃です。

市内には水田稲作を本格的に始めた初期の遺跡として、福田遺跡や宮ノ西遺跡があります。白岩遺跡からは紀元前１世紀頃の木製農具と、それを加工するための石製工具類が発見され、本格的な水田稲作が行われていたことが分かります。

川田・東原田遺跡は紀元前後の大規模集落で、多くの竪穴建物跡・平地式住居跡・独立棟持柱建物跡・方形周溝墓が発見されました。白岩遺跡は菊川上流、川田・東原田遺跡は菊川中流の中心的集落と推定されます。

弥生時代後期の２～３世紀には、平野部だけでなく、高田ヶ原遺跡や三沢西原遺跡など台地や丘陵上にも集落が営まれ、遺跡数も急増します。農耕社会は次の時代に向け、大きく発展しました。

紀元前2～1世紀
(福田遺跡)【地図：P72】

紀元前後
(政所本屋敷遺跡)
【地図：P70】

1～2世紀
(赤谷遺跡)【地図：P69】

写真１　弥生土器
弥生土器は食料を入れる壺、煮炊きをする甕、食べ物を盛る高坏があります。時期によって形が変化します。

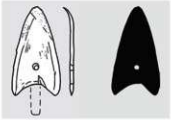


図１　青銅製の矢じり
(耳川遺跡)【地図：P70】
弓矢は、狩猟用だけでなく、武器として戦争にも使われました。矢じりは石製から、威力のある青銅製や鉄製に変わりました。

写真２　弥生時代のムラ（静岡市・登呂遺跡）
人は竪穴建物などに住み、米は高床式倉庫に貯蔵されました。ムラの中にはお祭り用の場所があり、周りには水田が広がっていました。

写真３　川田・東原田遺跡【地図：P72】
中央公民館が建つ場所にあった2,100～2,000年前のムラの跡で、住居跡・倉庫跡・方形周溝墓などが発見されました。大型の掘立柱建物は、ムラのシンボル的建物でした。

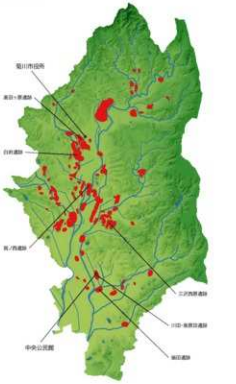


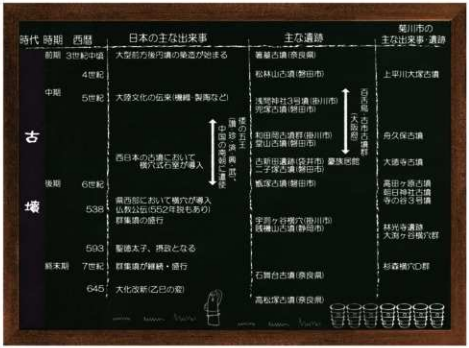
図２　弥生時代の遺跡分布
水田が営まれるようになり、生活の場は平野部に移ります。弥生時代後期になると、ムラは台地上にも見られます。

3 古墳時代

豪族の出現と菊川

3世紀中頃になると大和（奈良県）では大型前方後円墳が造られるようになります。そして、大和王権との関係を強めた地方豪族も前方後円墳をはじめ、前方後方墳・方墳・円墳などの大型古墳を築造しました。古墳は7世紀まで全国的に造られるので、この時代を古墳時代と呼びます。また、この時代は日本で国家が形成された時期であり、中国や朝鮮半島といった東アジア世界との交流も活発に行われました。

古墳時代は3世紀中葉から4世紀までを前期、5世紀を中期、6世紀から7世紀を後期とするのが一般的です。市内に築かれた最初の古墳は前期の上平川大塚古墳で、中国製の三角縁神獣鏡が副葬された前方後円墳です。中期にも舟久保古墳や大徳寺古墳などの前方後円墳が築かれました。高田ヶ原古墳や寺の谷3号墳の墳丘には墳輪が並べられました。後期は丘陵斜面に横方向に掘った穴を埋葬施設とする横穴墓が採用され、7世紀に爆発的に増加しました。飾大刀や金銅装馬具が出土した大洞ヶ谷横穴群は、有力家族を被葬者とする代表的な例です。



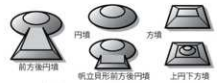
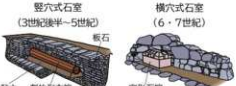


図1　古墳の形
前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などがあります。他には朝日神社古墳のような帆立貝形もあります。



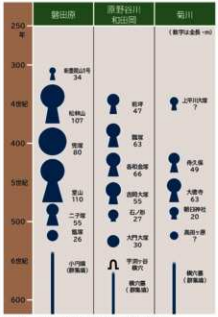


図3　古墳の形や大きさの変化
途江の豪族層は、磐田原や和田岡原に古墳群を築きました。菊川流域でも、上平川大塚古墳・舟久保古墳・大徳寺古墳・朝日神社古墳などの有力古墳が継続して築かれました。

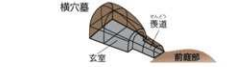


図2　豪族が葬られた棺と施設
有力な豪族が葬られたのは前方後円墳で、内部施設が竪穴式石室、棺は割竹形木棺でした。6世紀にはほとんどが横穴式石室の円墳や横穴墓になります。

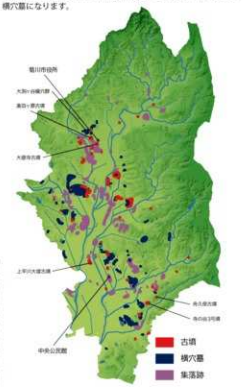


図4　古墳時代の遺跡分布
古墳の多くは、菊川や中の支流を見渡すことのできる丘陵上に築かれました。高田ヶ原丘陵には大徳寺古墳など有力な古墳があります。

写真1　横穴墓の発達（虚空蔵横穴群）【地図：P66】
古墳時代後期には全国的に横穴式石室をもつ小円墳が密集して築かれますが、菊川市では横穴墓が築かれました。

4 奈良・平安時代

奈良の都と遠江国城飼郡

菊川流域は、奈良・平安時代には遠江国城飼郡に属していました。奈良時代は律令とよぶ法律ができ、天皇を中心とした国家が成立した時代です。都は710年に平城京（奈良県）に置かれたため8世紀を中心に奈良時代、794年以降は平安京（京都府）に置かれたため平安時代と呼ばれます。平安時代は12世紀の終わり頃まで続きます。

遠江国の中心は磐田原台地南西部にあり、現在の磐田市に国府と国分寺が置かれました。そして、菊川市には遠江国城飼郡の郡家（郡役所）が設置されました。宮ノ西遺跡からは木に墨書された郡家からの命令文（「郡符木簡」）が発見されたため、周辺に郡家の政庁や正倉・館といった中心施設の存在が考えられます。政庁は政治の場、正倉は倉、館は宿泊所にあたります。また、郡家と関係の深い加茂廃寺跡の存在も推定されます。

743年、仏教の力により国や社会が安定することを願って国分寺建立の詔が出されました。地方には国ごとに国分寺と国分尼寺が建立されました。外京の東大寺には大仏が造立され、総国分寺と称されました。

図1　古代遠江国の郡名
遠江国には13郡があり、菊川市から掛川市南部は城飼郡にあたります。郡家は宮ノ西遺跡の周辺に推定されています。このあたりが、城飼郡の政治・経済・文化・信仰の中心地であったと考えられます。

写真1　郡家跡
（藤枝市・御子ヶ谷遺跡）（志太郡衙跡）
宮ノ西遺跡で発見された建物跡は小規模でしたが、周辺には御子ヶ谷遺跡のような郡家の中心的な大型建物群の配置が推定されます。

図2　遠江国分寺跡（磐田市・復元園）
遠江国分寺は国府に近い磐田原に建立されました。また、城飼郡にも加茂廃寺がありました。仏教の力で、国中の安定を祈願したと考えられます。

城飼郡

新野	狭東	土形	松浦	朝夷	鹿城	高橋	河上	荒木	新井	加美	高山寺本	遠江国
左近加	左近加	比知加多	末豆不知	阿毛比奈	加良古			高比為				
新野	狭東	土形	松浦	朝夷	鹿城	高橋	河上	荒木	新井	加美	大東急記念文庫本	
尓比乃	佐都加	比知加多	万都布知	安佐比奈	加良古	多加波之	加波知美		安良米	尓比井		

表1　『倭（和）名類聚抄』の郷名
『倭（和）名類聚抄』は平安時代に・できた百科事典にあたる書物で、城飼郡には11郷が記されています。土方など半数以上の郷名は現在も地名として残っています。

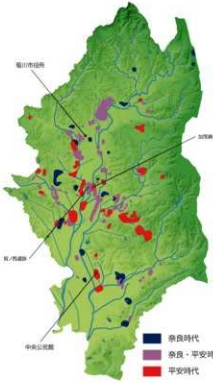


図3　奈良・平安時代の遺跡分布
加茂地区には城飼郡家や寺院があり、周辺には有力な人々も住んでいたと考えられます。また、菊川流域には多くの遺跡が分布しています。

5 鎌倉・室町時代

菊川の有力武将 —横地氏と内田氏—

菊川市の鎌倉～戦国時代を代表する武将に、横地氏と内田氏がいます。

横地氏は 源 義家の子・家永を初代とする家柄で、鎌倉時代には御家人・室町時代には奉公衆として活躍しました。1333 年に鎌倉幕府が滅びると、全国の武将が足利尊氏率いる北朝と、後醍醐天皇率いる南朝に分かれて戦いました。幕府側についた横地氏 10 代・家長の時に、館周辺の山上に山城（横地城・小太郎砦）を築いて、戦乱に備えました。この後、横地氏は守護の代わりに遠江国の警備や政治を担当する在庁官人として、一族の勝間田氏とともに活躍します。

内田氏は、天台宗園城寺（三井寺）を領家とする遠江国内田荘下郷の地頭です。1221 年の承久の乱で幕府側として戦った内田氏は、石見国貞松郷・豊田郷（島根県浜田市）に領地を得て地頭となりました。内田氏は南北朝の内乱でも幕府側につきましたが、致景の代以降、遠江国で活躍していた記録が途絶えることから、次第に石見国貞松郷・豊田郷に本拠地を移したと考えられています。

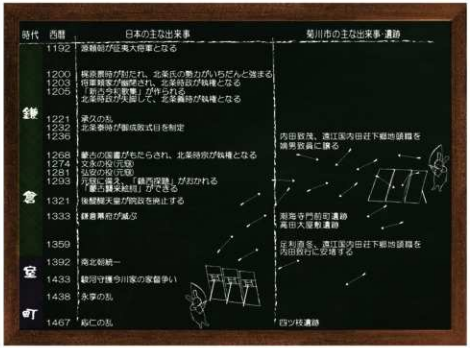


表 1　横地氏年譜

時代	西暦	和暦	横地氏の主な歴史	主な出来事
平安時代	1156	保元元年	保元の乱。横地氏は源義朝方に加わる	保元の乱(1156) 平治の乱(1159)
	1181	養和元年	長重、源頼朝の命で遠江国橋本で倒える	源頼朝、伊豆で旗揚げ(1180)
	1186	文治２年	一条能保の婿法に長重他の御家人が従う	
	1187	文治３年	鶴岡八幡宮放生会の流鏑馬で長重が的立	平氏滅亡
	1190	建久元年	源頼朝の上洛。長重が条兵に加わる	源頼朝、鎌倉幕府の樹立 (1180~1192)
	1195	建久６年	源頼朝の東大寺供養参列。長重、警固兵	
鎌倉時代	1238	暦仁元年	幕府が長重を奉行として御川堀に御所造営	承久の乱(1221)
	1239	暦仁２年	長重、正月十日の棟飯で役を勤める	
	1250	建長２年	関院殿造営のため横地氏に負担が配分	
	1258	正嘉２年	幕府の正月行事の射手を長重が勤める	
	1261	弘長元年	幕府の正月行事の射手を長重が勤める	
	1263	弘長３年	前浜での御的射手に師重が選ばれる	
	1265	文永２年	御弓始の射手を師重が勤める	
	1266	文永３年	御弓始の射手を師重が勤める	文永の役：蒙古襲来(1274) 弘安の役：蒙古襲来(1281)
	1310	延慶３年	横地九郎左衛門入道新西、他阿真教と歌合	
	1336	建武３年	横地軍、鶴岡八幡宮に乱入した悪党と戦う	足利尊氏、室町幕府の樹立 (1336~1338)
			横地氏、北朝方として横地城に籠る	
南北朝時代	1337	建武４年	横地治郎宗、三方原合戦で今川側に加わる	
	1358	延文３年	足利義詮の将軍宣下、横地山城守、警固兵	
	1367	貞治６年	足利義詮の開白御会、横地山城守、警固兵	
	1370	応安３年	足利義満の北野社ほか参りに為長が随行	
	1372	応安５年	足利義満の大乗八幡宮参りに為長が随行	
	1375	永和元年	足利義満の石清水八幡参りに近習横地因幡守(為長か)が随行	
			横地軍、九州で今川範国に従い合戦、討死	
	1386	至徳３年	長重、遠江国大峰・平山・犬居をめぐる天野景隆との訴訟に敗れる	
室町時代	1392	明徳３年	足利義満の相国寺供養参列、長重、警固兵	南北朝統一(1392)
				駿河守護今川家の家督争い (1433)
	1438	永享10年	足利持氏追討の軍に横地氏が加わる	永享の乱(1438)
			足利将軍奉公衆に横地太郎が見える	
			永享の乱1439 前根水呑戦で長参戦死	
	1447	文安４年	足利将軍奉公衆に横地孫太郎が見える	
	1465	寛正６年	横地義寿、室町幕府の命で狩野氏討伐	応仁の乱(1467)
	1476	文明８年	横地城、今川義忠により落城	
			義忠、塩買坂にて落命	

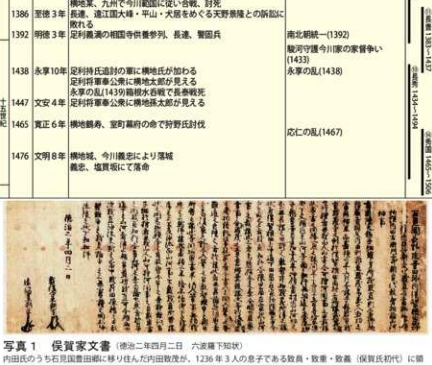


写真 1　保賀家文書（徳治二年四月二日　六波羅下知状）
内田氏のうち石見国豊田郷に移り住んだ内田致茂が、1236 年 3 入の息子である致眞・致重・致義（保賀氏初代）に領地を分け与えていたことが記されている書状です。

6 戦国時代

今川義忠の遠江侵攻戦と高天神城の攻防

1467年からはじまる応仁・文明の乱は地方にも影響を及ぼし、遠江国でも東軍側の駿河国守護・今川義忠と、西軍側の遠江国守護・斯波義良との戦いが起こりました。1476年、義良に味方した横地氏13代・秀国でしたが、遠江国守護所（磐田市）にて義忠に攻められ討死、横地城も落城します。東遠江の名門・横地氏は、ここに滅亡しました。一方、義忠も横地城を攻略後、その残党の抵抗を受け、塩買坂で流矢により落命しました。塩買坂付近に所在する正林寺境内には、義忠の供養塔（一石五輪塔）が祀られています。

戦国時代後半の1568年、今川氏は西から徳川氏・東から武田氏に攻められ、翌年には戦国大名としての今川氏は滅亡しました。今川氏滅亡後の菊川市域は、遠江国における重要な山城である高天神城（掛川市）を中心とする、徳川・武田両氏の攻防戦の地になりました。徳川氏は高天神城を包囲する6つの主な砦の内、菊川市内では獅子ヶ鼻砦を築いて交通路を遮断した結果、1581年高天神城は落城しました。

写真1　塩買坂【地図：P74】
横地城が落城すると、一族は四散したとされています。しかし、その残党は抵抗を続け、今川義忠は打ち取られます。その場所が、塩買坂といわれています。

写真2　正林寺【地図：P74】
正林寺は1517年に今川氏親が父・義忠を弔うために創建した菩提所の寺です。義忠の木像や位牌、寿桂尼（氏親の妻、義元の母）画像（掛軸）などが残されています。

写真3　今川義忠　供養塔【地図：P74】
戦国時代末期に出現した墓塔である一石五輪塔を使用した供養塔。正林寺に所在。義忠の墓所は龍洞寺（静岡市）にもあります。

写真4　堤城【地図：P72】
16世紀前葉、今川氏家臣の松井信眞の城とされています。近くには秋葉街道があり、交通の要衝地に築城されました。

図1　徳川家康による高天神城包囲
高天神城の包囲にあたって、6つの砦をはじめとする城砦群による包囲と、諸説原城（島田市）が東海道の補給路を絶つ位置であることが分かります。
（詳細は【コラム1：P28】）

7 江戸時代（1）

江戸幕府と菊川

1600年、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、1603年に征夷大将軍に任じられ、江戸に幕府を開きました。幕府は、全国を幕府領と大名領（藩）とに分け、大名が幕府の統制を受けながらも領地と人々を支配するという幕藩体制を築きました。菊川市域には、横須賀藩や掛川藩などの大名領のほかに、旗本領・幕府領・寺社領などが複雑に存在し、複数の領主による「相給」の村々もありました（幕末時、14村が相給）。

1645年、横須賀藩に本多利長が入部すると、異母兄である旗本・本多助久が城東郡で4500石余を分け与えられました。本多助久の代官としてこの地を治めたのが黒田家でした。黒田家は、1574年に甲斐の武田勝頼の高天神城（掛川市）攻めに加わり、その後帰農して旗本・本多氏の代官を勤めたといいます。

また、1622年に横須賀藩主として入部した井上正就の異母兄である旗本・井上重成は城東郡内に3,000石の領地を賜り、月岡に屋敷を構えました（月岡陣屋）。

時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事
江戸	1600	関ヶ原の戦い	
	1603	徳川家康が征夷大将軍となり江戸幕府を開く	
	1607	徳川家康、駿府城に入る	
	1614	大坂冬の陣	
	1615	大坂夏の陣 武家諸法度・禁中並公家諸法度制定	
	1617	日光東照宮の創建	
	1635	三代将軍家光が参勤交代の制度を確立 幕府が日本人の海外渡航、帰国を禁止	
	1637	島原の乱	
	1639	幕府がポルトガル船の来航を禁止	
	1645		本多助久、城飼郡を領する
	1651	家綱、四代将軍となる　由井正雪の乱	
	1656		横地村と神尾村で山論がおきる
	1657	江戸で明暦の大火	
	1680	綱吉、五代将軍となる	
	1690		権田用水に関する水論がおきる

表1　領主・寺社領の変遷例

旧村名	正保郷帳（1650年頃）	元禄郷帳（1700年頃）	旧高旧領取調帳（1870年頃）
赤土村	横須賀藩領 本多利朗知行 本多助久知行	本多主殿知行 本多右近知行 室賀甚四郎知行 米津周防守知行	三河西尾藩領分 丹波篠山藩領分 米津小太夫知行 宮城福之助知行
堀之内村	掛川藩領	掛川藩領	鍋島猶之助知行
潮海寺村	幕府領 幕府領（掛川藩預） 薬師（潮海寺）領	幕府領	太田運八郎知行 潮海寺領 長泉寺領
下内田村	横須賀藩領	三河吉田藩領	篠山藩領分 太田運八郎知行 宮城福之助知行

江戸時代前期・中期・幕末の領主と寺社領の変遷を示しました。一村に幕府直轄領・大名領・旗本領・寺社領が複雑に入り組んでいたことがわかります。

写真1　黒田家住宅　主屋【地図：P72】
黒田家は、旗本・本多氏の代官として、下平川村・上平川村・赤土村・横草村など8か村を支配しました。主屋は、国指定重要文化財。現在の主屋は、安政の大地震（1854年）後に再建されたもので、1861年頃に建てられたものと考えられています。

写真2　黒田家住宅　長屋門【地図：P72】
国指定重要文化財。長屋門は18世紀前半の建築と考えられています。主屋の再建時に改造が加えられました。このほか、米蔵と来蔵も重要文化財に指定されています。

写真3　月岡陣屋跡（関口隆吉顕彰碑）【地図：P70】
1870年、関口隆吉は月岡にあった旧旗本・井上氏の陣屋跡に移り住み、牧之原台地の茶園開拓事業に着手しました。隆吉は、1884年に静岡県県令、1886年には地方官官制により初代静岡県知事に任命されました。

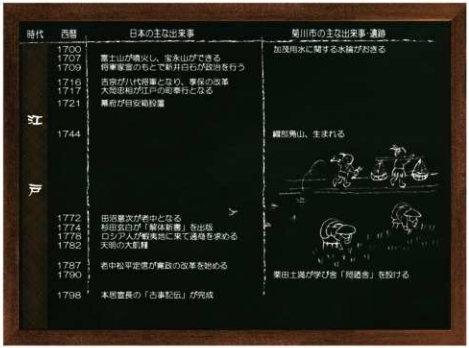
8 江戸時代（2）

いのちの水　―用水をめぐって―

大河川がない私たちの菊川市域や掛川市域は古くから水に苦しめられてきました。今に残る用水路や300を超える溜池がそれを物語っています。

江戸時代は農業生産を基盤としていたため、生産力の向上や新田開発のために用水を確保することは幕藩領主にとって重大な関心事でした。江戸時代初期には、戦国時代の築城技術や鉱山開発で蓄積された土木技術が活かされ、大規模な築堤工事や水路開削工事が行われました。

菊川から水を引く嶺田用水は、井宮神社で三筋に分かれて南流して村々を潤しています。嶺田用水は古文書によれば、嶺田村の水不足の状況を耳にした徳川家康が、横須賀藩主・大須賀忠政に命じて開削したと伝えます。一方、東嶺田の中条に住んでいた右近太夫が村々の窮状を徳川家光に直訴して処刑されたと言い伝えもあります。用水をめぐって江戸時代を通じて何度も村々の間で相論が繰り返され、幕府の裁決を求めることもありました。常に水を管理しなければならない田を潤す水は、地域の人々にとってまさに「いのちの水」であったのです。



時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事・遺跡
江戸	1700		加茂用水に関する水論がおきる
	1707	富士山が噴火し、宝永山ができる	
	1709	将軍家宣のもとで新井白石が政治を行う	
	1716	吉宗が八代将軍となり、享保の改革	
	1717	大坂出船が江戸の廻船行となる	
	1721	庶民が目安箱投書	
	1744		縄梨角山、生まれる
	1772	田沼意次が老中となる	
	1774	杉田玄白が「解体新書」を出版	
	1778	ロシア人が蝦夷地に来て通商を求める	
	1782	天明の大飢饉	
	1787	老中松平定信が寛政の改革を始める	
	1790		栗田土満が学び舎「問造舎」を設ける
	1798	本居宣長の「古事記伝」が完成	

写真1　嶺田文書
嶺田区に伝わる嶺田文書には、嶺田用水に関する資料が多く残されています。

写真2　嶺田用水【地図：P72】
菊川から取水して嶺田村の北部で三筋に分岐して南流し、牛渕川に落ちる用水路です。後方は、井宮神社。

写真3　井宮神社【地図：P72】
嶺田村の人々は、幕府に用水路の開削を直訴したと右近太夫の功績を讃えて社に祀り、後に井宮神社と称されるようになりました。

写真4　加茂用水（上：井成神社。下：加茂井堰跡）
【地図：P69】
戦国時代、今川氏家臣・三浦刑部の開削によると伝えられています。菊川の水が加茂村、本所村、潮海寺村の3村の水田を支えました。その功績を讃えて、井成神社が建立されています。加茂用水をめぐり、江戸時代に水論がたびたびおこっています。

9 江戸時代（3）

東海道と秋葉道

征夷大将軍として江戸を本拠地とした徳川家康は、東海道をはじめとする五街道や本坂道・秋葉街道・身延街道等の脇往還の整備を積極的に進めました。東海道五十三次と呼ばれる53の宿場の内、静岡県域には22の宿場が整備されました。

街道の整備により人々の移動が盛んになり、朝鮮通信使や琉球使節、文人墨客が東海道を往来し、各宿場を中心に多彩な文化人が出現しました。

一方、学問の分野では、古事記や万葉集などの古典を研究する国学が江戸中期より勃興し、各地で多くの国学者を輩出しました。城東郡平尾村（中内田）の神主の家に生まれた栗田土満も、30歳代で賀茂真淵や本居宣長に国学を学びました。土満は、平尾の地に岡遜舎といわれる学び舎を設け、多くの人々に国学や和歌を教えました。城東郡浜野村（掛川市）に生まれた八木美穂もその一人で、美穂がまとめた地誌『郷里雑記』は、菊川市域を含めた横須賀藩領の村々の地勢、産物、寺社、風習等を今日に伝える貴重な資料となっています。

時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事・遺跡
江戸	1802	十返舎一九が「東海道中膝栗毛」出版	
	1805		栗田土満と白松真道が官位願いに上京する
	1813		三代目本間香城、玄聖講結成
	1815		島天神社常夜燈、建立
	1821	伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」が完成	
	1824		大頭神社の鳥居、建立
	1833	天保の大飢饉	野賀岐山、生まれる
	1834	安藤広重の「東海道五十三次」が完成	
	1836		天保の大飢饉
	1841	老中水野忠邦が天保の改革を始める	
	1849		野賀歴堂、生まれる
	1850		川田瑞穂、牛種牧を開始する
	1853	ペリーが浦賀に来航	
	1854	日米和親条約	安政の東海大地震
	1858	日米修好通商条約　安政の大獄	
	1860	桜田門外の変	
	1867	徳川慶喜が大政奉還を行い、朝廷は王政復古の大号令を出す	本間清雄、フランス万国博覧会に出席

写真1　応声教院　山門【地図：P70】
江戸幕府2代将軍徳川秀忠の生母である お愛の方（西郷の局）の菩提寺・宝台院（静岡市）山門として1628年に建立され、1918年に現在地に移築されました。規模や構造は、桁行三間・梁間一間、一重・切妻造・本瓦葺であり、国の重要文化財に指定されています。

写真2　島天神社常夜燈【地図：P68】
1815年に建立、火伏の神として信仰を集めた秋葉神社への道は、秋葉街道と呼ばれました。街道に設置された常夜燈には一晩中灯りがともされ、街道を行き交う人々の足元を照らしました。今に残る「秋葉信仰と街道」は、令和4年度に「しずおか遺産」に認定されました。

写真3　塩買坂と秋葉街道
（上：塩買坂周辺の金比羅宮、下：正林寺西側）【地図：P74】
秋葉街道は、「塩の道」でもありました。現在の牧之原市相良から菊川市、掛川市、森町、浜松市天竜区水窪を経て長野県塩尻に至る街道は、塩が北上した南北の交易路でした。塩とともに人、もの、文化も行き交いました。塩買坂は塩の取引に由来する地名と伝えられています。

写真4　栗田土満顕彰碑【地図：P70】
栗田土満を顕彰するため、平尾八幡宮の境内には顕彰碑が建立されています。また、平尾八幡宮南側の丘陵には、生誕地を示す標柱が設置されています。

10 明治時代

近代化と日清・日露戦争

近代の菊川市域は、静岡藩の成立から始まります。江戸幕府が消滅し、生活基盤を失った旧幕臣は静岡へ移住し、生活のため牧之原を開拓して、茶を栽培します。

1871年5月の廃藩置県で静岡県となり、12月静岡県の分割で浜松県に編入となり、1876年8月に浜松県が静岡県に合併され、静岡県となりました。

1888年、市制・町村制が公布、翌年河城村・西方村・加茂村・六郷村・横地村・中内田村・下内田村・平田村・南山村・川野村・相草村が成立します。1896年に郡制が施行、佐野郡と城東郡が統合されて小笠郡が成立します。

1894年の日清戦争では、旧菊川町域で83名が出征・4名が戦病死、旧小笠町域で47名が出征・6名が戦病死したとされます。1904年の日露戦争では、旧菊川町域で334名が出征・30名の戦病死者、旧小笠町域で249名が出征・18名の戦病死者を出しています。

時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事・遺跡
	1868	五箇条の御誓文	
	1869	版籍奉還	関口隆吉、用地に居を構え牧之原の開拓に尽力
	1870		
	1871	廃藩置県	菊川市域は浜松県に編入
	1872	東京～横浜間に鉄道が開通　学制発布	
	1873	地租改正	菊川市各地に小学校が設立される
	1876		浜松県が静岡県に合併され、静岡県となる
明	1877	西南戦争	
	1878		中内田小学校が内田学校に改称 （現在の内田郷土資料館）
	1884		関口隆吉、静岡県令となる
	1886		関口隆吉、静岡県知事となる
治	1888	市制・町村制が公布	市制・町村制公布により翌年各村が成立
	1889	大日本帝国憲法発布	東海道線が開通し堀之内駅が開業
	1891		橋本孫一郎によって双松学舎が創立
	1892		造船出雲丸撃沈事件、地域方の唐崎源作らが遺之内周辺調査を実施
	1894	日清戦争	
	1895	下関条約	
	1896		佐野郡と城東郡が統合されて小笠郡が成立
	1899		堀之内～南山間に城東馬車鉄道が開業
	1902	日英同盟	
	1904	日露戦争	
	1905	ポーツマス条約	
	1911		牛淵川水害予防組合の結成

写真1　牧之原台地に広がる茶園風景
静岡に移住した旧幕臣の中に、後に初代静岡県知事となる関口隆吉がおり、1870年には金谷原開墾方頭取並となり、開拓に尽力しました。

写真2　旧内田学校職員室【地図：P70】
1872年に学制が公布され、翌年西方学校を始めとして、各地に小学校が設立されます。写真は、1873年に開校した中内田小学校が、1878年に内田学校と改称した際に、校舎と同時に建てられた職員室です。現在は内田郷土資料館となっていて、内部が見学できます。

写真3　双松学舎（写真の年代不明）【地図：P73】
1891年に橋本孫一郎によって創立されます。高等小学校卒業者を入学資格とし、人格教育と徳育教育を柱に、質の高い教育を行いました。
なお、孫一郎の五男は、植物学者の橋本格郎です。

写真4　赤れんが倉庫【地図：P68】
1899年に堀之内～南山間に城東馬車鉄道が開業すると、堀之内はさらに発展します。この頃、堀之内駅前には茶を扱う倉庫群があり、赤レンガ倉庫もその1つです。赤レンガ倉庫は2014年、菊川市初の国指定登録有形文化財に認定されました。

写真5　堀之内駅舎（写真は1921年頃）
1889年に東海道線が開通し堀之内駅が開業すると、丸尾文六や原崎源作らが1892年に「堀之内茶再製所」を興し、のちに富士合資会社が駅前付近に茶の再製工場を作りました。

11 大正・昭和時代（1）

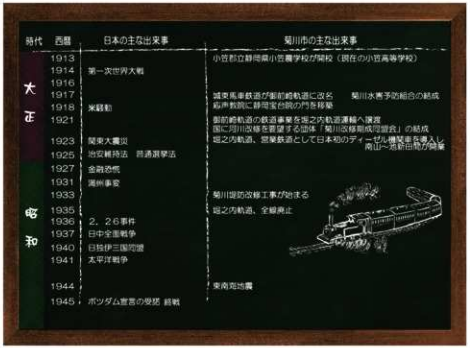
堀之内軌道とアジア太平洋戦争・東南海地震

1913年、県立小笠高等学校の前身である小笠郡立静岡県小笠農学校が小笠郡六郷村半済に開校します。

1923年、西方村に町制が施行されて堀之内町となります。1940年には川野村・相草村が合併して小笠村が成立、1942年には中内田村と下内田村が合併して内田村が成立します。

アジア太平洋戦争では、菊川市域からも多くの人が出征し、旧菊川町では737人・旧小笠町では451人が戦病死しています。戦争末期には、牧之原台地に大井海軍航空隊の飛行場が作られ、地下壕が水水加にも掘られています。

1944年12月7日、熊野灘を震源としたマグニチュード7.9の「東南海地震」が発生します。菊川市域では平田村と横地村は家屋全壊率が30%を超えており、震度7と判定されていますが、戦争中だったためほとんど報道されませんでした。



時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事
大正	1913		小笠郡立静岡県小笠農学校が開校（現在の小笠高等学校）
	1914	第一次世界大戦	
	1916		
	1917		城東馬車鉄道が御前崎軌道に改名　菊川水害予防組合の結成
	1918	米騒動	県声教院に静岡支部の門各開設
	1921		御前崎軌道の鉄道事業を堀之内軌道運輸へ譲渡 国に「河川改修を要望する団体「菊川改修期成同盟会」の結成 堀之内軌道、営業鉄道として日本初のディーゼル機関車を導入し、南口～吉岡間が開業
	1923	関東大震災	
	1925	治安維持法　普通選挙法	
	1927	金融恐慌	
	1931	満州事変	
	1933		菊川堤防改修工事が始まる
昭和	1935		堀之内軌道、全線廃止
	1936	2、26事件	
	1937	日中全面戦争	
	1940	日独伊三国同盟	
	1941	太平洋戦争	
	1944		東南海地震
	1945	ポツダム宣言の受諾　終戦	

写真1　小笠農学校（写真は大正時代初期頃）
農業の盛んな地域にもかかわらず、現在の御田市や森町、藤枝市にまで行かないと農学校が無かったため志望者が殺到しました。

写真2　佐栗谷隧道【地図：P66】
菊川市高橋字佐栗谷と御前崎市新野の境界にある全長93.3mのトンネルで、両端は煉瓦造りですが、中央部は掘り放しです。

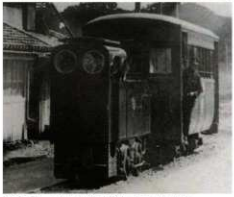


写真3　オット機関車（写真は1924年）
1917年、城東馬車鉄道は横原部御前崎村への延伸を目指し御前崎軌道と改名しましたが、1921年に御前崎軌道の鉄道事業は堀之内軌道へと譲渡されます。1923年12月、堀之内軌道は営業鉄道としては日本初のディーゼル機関車を導入します。この機関車は、ドイツのオットーサイクル方式のガソリン起動型ディーゼル機関車で、沿線の人々からは「オット」の愛称で呼ばれました。
しかし、1935年に堀之内軌道は全線廃止されました。

写真4　改修前の菊川（1933年）
菊川は洪水被害が頻発したため、国に河川改修を要望する団体として全国で初めて菊川改修期成同盟会が1921年に結成されます（写真は菊川・牛淵川合流点より流）。

写真5　東南海地震（写真は平田周辺の被災状況）
小笠郡全体で死者20人・負傷者36人、住家全壊1,154棟・半壊1,407棟、非住家全壊840棟・半壊1,284棟と大きな被害がありました。

12 昭和時代（2）

戦後の発展と菊川市の成立

1946年、小笠用水施設期成同盟会が発足、水不足への抜本的な対策と水利施設の近代化を県や国に訴えていきます。その結果、1950年に国営大井川農業水利事業の事業地区に組み入れられ、1968年に完成します。

1954年、堀之内町・六郷村・加茂村・横地村・内田村が合併して菊川町が誕生、同年には平田村・南山村・小笠村が合併して小笠町が誕生します。1955年菊川町に河城村を編入、1957年小笠町に城東村大石地区を編入、菊川町に小笠町棚草原地区を編入します。

1999年、第二期国営大井川土地改良事業が着工し、2018年に事業が完了しました。

2005年、菊川町と小笠町が合併して菊川市が発足し、同日菊川町・小笠町は廃止となります。合併後の人口は約47,000人で、両町に同じ「棚草」地区が存在していたため、合併にともない旧菊川町の棚草地区を「牧之原」に名称変更しました。

時代	西暦	日本の主な出来事	菊川市の主な出来事
昭和	1946	日本国憲法公布	小笠用水施設期成同盟会発足
	1950	朝鮮戦争	堀之内町、六郷村、加茂村、横地村、内田村の1町4村による「国民健康保険菊水病院」の開院
	1951	サンフランシスコ講和条約 日米安全保障条約	
	1953	NHKがテレビを開始する	
	1954		堀之内町、六郷村、加茂村、横地村、内田村の1町4村が合併し、菊川町誕生 「国民健康保険菊水病院」から「菊川病院」に改称 平田村、南山村及び小笠村が合併し、小笠町誕生
	1955		菊川町に河城村を編入
	1956		
	1957	国際連合に加盟	小笠町に城東村の大石地区を編入 菊川町に小笠町の棚草原地区を編入
	1958	東京タワー完成	
	1960	カラーテレビ放送開始	
	1961		菊川町と小笠町が国民健康保険菊川病院組合を設立
	1964	東海道新幹線開業 東京オリンピック開催	「菊川病院」から「共立菊川病院」に改称
	1969	東名高速道路が全面開通	菊川インターチェンジの設置
	1972	沖縄返還	
平成	2005		菊川町と小笠町が合併、菊川市誕生

写真1　共立菊川病院（写真は1982年頃）
1950年、堀之内町・六郷村・加茂村・内田村・横地村の1町4村による「国民健康保険菊水病院」が開院します。1954年、菊川町が誕生し菊川病院に改称、1961年に小笠町と国民健康保険菊川病院組合を設立、共立菊川病院に改称します。菊川市誕生にともない、現在の菊川市立組合病院となります。

写真3　「深蒸し茶」発祥の地
深蒸し煎製法の研究に取り組んだ中心生産農家で、研究から生産出荷に至った農家として氏名が公表されている小松喜三次・丸尾雄彦・和田秀雄の各氏は、菊川市内の農家です。こうしたことから、菊川市は「深蒸し茶」発祥の地と称しています。
全国に先駆けて、茶農協の設立による組織的な技術向上と良質茶の量産化を実現し、全国茶品評会での「深蒸し煎茶」部門の新設や全国への普及・拡大に大きく貢献しました。
また、2023年3月31日に地理的表示（GI）保護制度に登録されました。深蒸し菊川茶の登録は茶としては県内初であり、菊川茶の製造技術と品質が高く評価され今回の登録となりました。

写真2　菊川インターチェンジ
（写真は1969年頃）
1969年に東名高速道路が開通、菊川インターチェンジが設置されます。これ以降、半減や本所地区を中心に工場が進出していきます。

①茶摘みハリ取り作業
②ハリ取った茶草は切断
③茶草を茶園へ投入
④機械が高まり、土壌が柔軟化

写真4　「茶草場農法（①～④）**」、「千枚棚田」**
菊川市を含む4市1町（掛川市、菊川市、島田市、牧之原市、川根本町）の「静岡の茶草場農法」は、2013年に世界農業遺産に認定されました。
また、「上倉沢の棚田」は「千枚（せんがまち）棚田」と呼ばれ、近代に棚田の一部を茶草場として利用してきました。この水田と茶草場を行き来できる環境が、生物の多様性を育むうえで重要であることが判明し、世界農業遺産「静岡の茶草場農法」に含まれることとなりました。【地図：P66】

コラム1

高天神城の攻防と菊川

今川氏滅亡後の菊川市域は、遠江国における戦いのための重要な山城である高天神城（掛川市）を中心とする、徳川氏と武田氏の攻防戦の地になりました。

高天神城の最初の城主は徳川氏側の小笠原氏興と子の氏助でしたが、1574年武田信玄の子である勝頼が高天神城を攻め、小笠原父子は降伏し武田氏側の武将となります。

1577年以降は武田氏の支配下になった高天神城を、反対に徳川氏が攻めるようになります。徳川氏は小笠山山頂に砦（小笠山砦）を築いた後、高天神城の周辺に中村（山）砦・能ヶ坂砦・火ヶ峰砦・三井山砦（いずれも掛川市）のほか、菊川市でも獅子ヶ鼻砦の六砦を築くことにより高天神城を包囲した結果、1581年に高天神城は落城、再び徳川氏側の城となりました。この時武田勝頼は、高天神城の救援に来ることができなかったため権威は失墜、翌年に織田信長と徳川家康の連合軍に攻められ武田氏は滅亡しました。

図1　高天神城と六砦ほかの城砦群
高天神城の包囲には、20にも及ぶ砦が築かれました。砦は物資の搬出入を目的としたものや、間道をおさえるものなど機能が分かれていました。これにより円滑な物資輸送と兵力の補充・交代が容易となり、高天神城の長期包囲網を優位に進めました。

図2　獅子ヶ鼻砦【地図：P72】
防御用の堀切はなく、兵が駐屯した曲輪のみからなる山城で、高天神城を攻撃するための城であることが分かります。

コラム2

“今川さま”と棚草用水

菊川市には戦国時代の戦いの歴史だけでなく、今川氏真が行った善政も伝えられています。

棚草城の一画には、廃寺となった雲林寺があります。ここには、氏真を祀る「今川さま」の祠が現在でも残っています。

今川氏最後の当主である氏真がなぜ祀られているのか？

『棚草村文書』には、棚草の領主である朝比奈孫十郎に対して用水の特権を許した文書が残されています。

地元では、用水の特権を与えてくれた恩義に対し、祠を建てて氏真を祀ったものと伝えられています。

この用水は、丹野川から取水した「棚草用水」のことです。棚草用水ができたことで、地元の農民は水不足に悩むこともなくなったと思われます。

今川氏滅亡の大きな要因とされている氏真ですが、菊川市域においては慈愛に満ちた一面を見ることができます。

写真1　雲林寺跡と棚草地区【地図：P73】
小高い丘陵の茶畑の中に、寺が存在した平地が残っています。

写真2　「今川さま」【地図：P73】
今川氏真を祀る位牌が納められています。毎年3月には、地域の方による祭りが行われています。